

トルストイ『戦争と平和』とロシア社会 —祖国戦争 100 周年と第一次世界大戦に見る

池田嘉郎

はじめに

1812年の祖国戦争の記憶は、ロシア社会の自意識の重要な一部である。その記憶に生き生きとした形象を与える上で、レフ・トルストイの『戦争と平和』（執筆 1863-1869年）は大きな役割を果たしてきた。独自の歴史哲学や人物評価を含んでいることもあり、この作品は様々な論争を惹起してきた。他方、その芸術的な魅力によって、同作がロシア社会の広範な層に対して統合的な機能をしばしば発揮してきたことも否定できない。

ロシア社会が『戦争と平和』をどのように受け止めてきたのかを考える上で、1912年に始まる数年間は、とくに興味深い時期である。1912年は祖国戦争 100周年であり、ついで1914年からは第一次世界大戦が始まる。帝政末期にあたるこの時期、ロシア社会は様々な内部対立に悩まされていた。だが、まさにこの数年間に、『戦争と平和』に対する社会的関心は大いに高まりを見せたのである。当時、人々はどのような観点から『戦争と平和』を読み、また同作についてどのような議論を行なったのであろうか。この問いに答えることが、本稿の課題である。

祖国戦争 100周年と第一次世界大戦は時間的に近接しており、『戦争と平和』に対する関心の高まりという点でも連続性が見られる。とはいえ、それぞれがロシア社会において個別の事象であったことも明らかである。本稿では両者の連続性に留意した上で、二つの事象について別個に論じたい。1912年に関しては、従来十分に取り上げられていないポルネル・オブニンスキー編『戦争と平和』を中心に論じ、第一次世界大戦期に関しては、より広範に史料の分析を行なう。先行研究では、祖国戦争 200周年を記念して刊行された『ロシアの文化的記憶における 1812年の祖国戦争』が、同戦争の記憶という、本稿の主題に深く関わる問題を扱っている。¹しかし、同書の主題はあくまで祖国戦争であるため、『戦争と平和』への言及は時期によって濃淡がある。1912年については同作の言及は不

¹ Отечественная война 1812 года в культурной памяти России. К 200-летию победы России в Отечественной войне 1812 года. М., 2012. 同書の内容をご教示下さった鳥山祐介氏に御礼申し上げます。

十分であり、第一次世界大戦期についてはロシア社会と同作の関わりは全く論じられていない。トルストイの受容の仕方からロシア社会の動向を考えるという視点については、1920年代に関するウィリアム・ニッケルの論文が参考になった。² プルーストのトルストイ論に関する坂本浩也の論文は、外国の作家が第一次世界大戦期に『戦争と平和』をどう読んだかについての興味深い事例研究である。³

第一次世界大戦研究の側から見れば、本稿は、大戦中にロシアにおいてどのような愛国主義的文化が生み出され、その統合力はどの程度のものであったのか、という問題に関わっている。この問題に関して、フバータス・ヤーンが1995年に刊行した先駆的な研究においては、第一次世界大戦中のロシアで愛国主義的文化が十分に発展しなかったことが指摘されている。⁴ だが、ヤーンの研究は、ロシア社会の分裂とそれによる帝政の崩壊という展開を過度に前提にしているように思われる。第一次世界大戦期に生み出された愛国主義的文化の一部が、ソヴィエト時代に発展的に引き継がれることを考えるならば、ヤーンの見解には見直しが必要なのではないだろうか。⁵

ここで本稿の構成について記すと、第1節で、1912年における『戦争と平和』をめぐる議論について検討する。愛国心のモチーフを強調する動きがある一方で、現状批判の観点から同作を再読する試みもあったことを明らかにする。第2節では、第一次世界大戦の開始とともに、『戦争と平和』が国内統合のためのテキストとして強い関心を集めたことを明らかにする。このことはまた、1912年に見られたような、現状批判の観点からの読解が著しく後退したということでもあった。第3節では、前節の議論を受けて、第一次世界大戦中における『戦争と平和』の読み方の特徴について論じる。開戦前にあった現状批判的観点からの読解が、否定的な評価の対象となったことにとくに着目する。第4節では、戦局の悪化にともない、『戦争と平和』をめぐる言説に、ロシア社会内部の対立が反映し始めたことを明らかにする。最後に「むすび」において、『戦争と平和』が1912年および第一次世界大戦期にどのように読まれたのかについて、とりわけ第一次世界大戦期の社会的統合の問題との関連で、まとめを行なう。

本稿の日付は全て露暦を用いる。重要な語の訳について一点記しておくが、народおよびнародныйは、全住民の統合を目標ないし前提としている場合には「国民」「国民的」

² William Nickell, "Tolstoi in 1928: In the Mirror of the Revolution," in Kevin M. F. Platt and David Brandenberger, eds., *Epic Revisionism: Russian History and Literature as Stalinist Propaganda* (Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 2006).

³ 坂本浩也「ナポレオン戦役から第一次世界大戦へ——トルストイの読者プルースト」『立教大学フランス文学』第41号、2012年。

⁴ Hubertus F. Jahn, *Patriotic Culture in Russia during World War I* (Ithaca: Cornell University Press, 1995).

⁵ 第二次世界大戦中について、Отечественная война 1812 года в культурной памяти России. С. 305-306, 参照。

と訳し、住民のうちの「民衆」的部分をもっぱら指す場合には「人民」「人民的」と訳した。

1. 祖国戦争 100 周年と『戦争と平和』

1912 年は祖国戦争から 100 周年の年にあたる。この年、ロシアではナポレオンに対する勝利を記念して様々な事業が行なわれた。それらの事業がもっていた政治的な傾向は、一様ではなかった。一方では祖国戦争は、王朝への忠誠や、愛国心、それに「国民的」な団結が発揮された機会として顕彰された。官製の企画においてこの傾向はとくに顕著であった。皇帝と皇族が参加して行なわれた、1912 年 8 月 25-26 日のボロジノにおける式典がその代表である。他方では、祖国戦争を論じることで、ロシアにおける政治・社会秩序を問い直そうとするものもいた。1911 年から 1912 年にかけて刊行された 7 巻本『祖国戦争とロシア社会, 1812-1912』は、そうした狙いをもつ企画であった。⁶ ジヴェレゴフ、メリグノーフ、ピチュータによる編者の言葉は、祖国戦争において農民と領主貴族の利害が対立していたことを強調した。また、排外主義的感情を煽るために祖国戦争を論じるべきではないとも念をおした。⁷

祖国戦争 100 周年との関連で、『戦争と平和』も頻繁に言及されることとなったが、そこでもまた、論者の政治的な立場によって作品の取り上げ方は違った。官の立場ではたとえば、『Л.Н.トルストイ伯爵の長編小説『戦争と平和』による、芸術的形象と絵画における 1812 年の諸事件』を例として挙げるができる。これは小説の抜粋集であり、ヴェレシチャーギンやレオニード・パステルナークなどの手になる 25 枚の挿絵がついていた。序言によれば、多くの作家が 1812 年の諸事件を描いてきたが、『戦争と平和』はそのどれをも凌駕する。「この本は何度も読み直すことができるし、常にその中に何か新しい、以前には気がつかなかったものを見つけることができる。毎回あらたに、ロシアとその過去に対して、その独立と一体性に対して、特別な高揚をもって愛情の念が湧き起こる。今日生きている国民に対してだけでなく、われわれよりも前に生きていた国民に対しても、身近さが意識される」。⁸

⁶ Голубев А.В., Секиринский С.С. 100-летие Отечественной войны 1812 года // Отечественная война 1812 года в культурной памяти России. С. 258-275. とくに С. 260, 264-265.

⁷ Дживелегов А., Мельгунов С., Пичета В. От редакции // Отечественная война и русское общество. Т. 1. М., 1911. С. IV, V.

⁸ События 1812 года в художественных образах и картинах по роману Война и мир гр. Л.Н. Толстого. СПб., 1912. С. 1.

刊行以来、『戦争と平和』は祖国戦争における軍人の姿を歪めるものだという批判を受けてきたのであるが、⁹ この引用に見るように、1912年までに同作を愛国心と結びつけて考えることは広く行なわれるようになっていたといえる。たとえば、祖国戦争100周年を記念し、「祖国戦争の英雄たちの思い出」に捧げられたレヴェンソン社版『1912年のカレンダー』でも、『戦争と平和』の文章と挿絵が美しく配置されていた。¹⁰

だが、愛国心を描いた小説の代表格であるとみなされるようになっていただけに、『戦争と平和』は、ロシア帝国の過去と現在の否定面に着目する人々にとっては、批判すべき対象ともなった。1912年に出た論文集『戦争と平和』は、まさにそのような批判を主な目的としていた。この本の構成は、トルストイおよび『戦争と平和』に関する分析と、祖国戦争に関する分析との二つの部分からなっていた。全体としてこの論文集は、歴史を題材にした小説がどのような工程を経て作成されたのか、またそこに現れている時代像はどのような特徴をもっているのかについて、多様な観点から解明した先駆的なものであった。編者はゼムストヴォ運動に深く関与していたポルネルと、立憲民主党(カデット)左派として社会主義者とも交流のあったオブニンスキーの二人である。¹¹

編者の序文によれば、各章の執筆者の政治的志向は様々であるが、彼らはみな「芸術家としてのトルストイに対する愛と、戦争に対する憎しみ」とによって結びつけられていた。「公式ロシアが祖国戦争100周年を祝ったのはそう前のことではない。ロシア社会とロシア国民の広範な層は、それらの式典にさして魅了されはしなかった。だが、誰もが自然と100年前にロシアが経験した苦難に思いを馳せることになった。トルストイの『戦争と平和』の諸情景は、特別に力強くわれわれの注意をひきつけるのである」。しかし、問題は『戦争と平和』も決して非戦主義の立場からは書かれていないということであった。それだけに編者は、『戦争と平和』と後年のトルストイとは観点が異なるということを強調した。「『戦争と平和』の理念は多くの点でトルストイの後年の見解とは対立している。もしこの大作家が同作完成の20年から30年後に同じ出来事の描写にとりかかったならば、彼は全く違った風な見方をしたであろう」。¹²

作家および作品研究に関する章を見ると、まずポルネルによる第1章「Л.Н.トルストイの『戦争と平和』」が総論的な位置づけである。そこでは、トルストイはロシア人の「愛

⁹ Подмазо А.А. Война вокруг «Войны и мира» Л.Н. Толстого // Отечественная война 1812 года в культурной памяти России. С. 162.

¹⁰ Календарь на 1912 г. В память столетнего юбилея Отечественной войны. [М.], [1912].

¹¹ Обнинский В.П., Полнер Т.И. (ред.) Война и мир. Памяти Л. Толстого. М., 1912. ポルネルについて、Либеральное движение в России 1902-1905 гг. М., 2001. С. 256.オブニンスキーについて、Печать // Речь. 26 марта 1916. С. 3.

¹² Обнинский В.П., Полнер Т.И. [Предисловие] // Обнинский, Полнер (ред.). Война и мир. С. V, VI.

国心の潜熱」(第3巻第2篇25章)を描いたというが、物語の中心はあくまで貴族社会であること、また、作品中で農奴制社会の不平等については十分な注意が向けられていないことが指摘された。ポルネルによれば、同作は19世紀初頭のロシアの完全な縮図であるという評価があるが、実際にトルストイが描いたのは当時の「貴族的ロシアだけ」である。全4巻1821頁のうち、「素朴な」人民が登場するのは150頁程度に過ぎず、しかもその大半は兵士、「戦争シーンの不可欠かつ不可避のアクセサリー」である。トルストイは、「当時の社会における深刻な社会的不平等と、そこから生ずる結果」に然るべき注意を向けようとは望んでいなかった。「ロシア軍の撤退とともに農奴に対する権力は破壊されたのであり、権力の空白期、また新体制の確立とともに、奴隷たちがどのような行動をとるのかは誰にも予想できなかった [...]。恐怖が、疑いなく、当時の貴族たちの行動様式における大きな要素であった。そして、恐らく、六月に女道化や黒人たちを連れてモスクワを去った貴婦人は、『愛国心の潜熱』によってそのように行動したのでは全くなく、自分の神聖なる財産を危険にさらすことができなかつたし、したくもなかつたからそうしたのである」(第3巻第3篇5章)。¹³

第2章は『戦争と平和』の執筆史、第3章はトルストイが用いた史料について、いずれもK.ポクロフスキーが書いている。トルストイがロシア社会の否定面を描かず、また個人の意思の役割を重んじなかつたため、デカブリストの登場を示唆するエピローグの位置づけが曖昧なものになっていると指摘している。¹⁴

第4章「Л.Н.トルストイの歴史哲学」は、歴史家ペルツェフの手になる。『戦争と平和』における人間観・歴史観では、個人の意図による努力は大衆の集団的行為に埋没することになるが、大衆は決して一枚岩ではなく、その内部に様々な利害対立を抱えているとペルツェフは指摘する。他方で、トルストイが集団や、素朴で「非文化的」な人々の行動を重視する点は、心理学における意識下の動きへの着目、また人類学における未開人への関心を先取りしているともペルツェフは評価している。¹⁵

第5章から第9章までは、祖国戦争に重点をおいた分析であり、その上で『戦争と平和』にも言及がなされる。ジヴェレゴフ、メリグノーフ、ピチュータという、『祖国戦争とロシア社会』全7巻の編者も全て登場する。評論家・歴史家ジヴェレゴフの第5章「アレク

¹³ Полнер Т.И. «Война и мир» Л.Н. Толстого // Обнинский, Полнер (ред.). Война и мир. С. 62, 79, 80; Толстой Л.Н. Полное собрание сочинений в 90 томах. М., 1928-1958. Т. 11. С. 210, 280.

¹⁴ Покровский К.В. 1) История работы Л.Н. Толстого над романом «Война и мир»; 2) Источники романа «Война и мир» // Обнинский, Полнер (ред.). Война и мир. Эпиローグについての指摘は第3章にある(С. 110-111.).

¹⁵ Перцев В.Н. Философия истории Л.Н. Толстого // Обнинский, Полнер (ред.). Война и мир. С. 143-145.他に第11章 Козловский Л.С. Война и мир в учении Л.Н. Толстого も作家および作品研究に関する章である。

「サンドルとナポレオン」は、二人の皇帝の社会的支持層などに着目した比較である。¹⁶ とりわけ迫力があるのは人民社会主義者党（ナロードニキ系だがエスエル党と違ってテロルは否定した）のメリグノーフによる第6章「1812年の戦争にて」で、回想史料などによって祖国戦争の苛酷な諸相が明らかにされる。たとえば、飢えで苦しむ敗走中のフランス軍の間では、仲間の遺体に対する食人が見られたし、パルチザンのフィグネルによる捕虜虐待は、彼がモデルの一人となったドロホフのものよりも凄惨であった。このようにトルストイは祖国戦争の悲惨な面を書いていないのであるとメリグノーフは強調した。¹⁷ ピチェータの第8章は祖国戦争が国民経済に与えた影響を論じている。¹⁸ もう一人の編者であるオブニンスキーの第10章「100年前と今日の戦争」は、祖国戦争と日露戦争の比較であり、現代批評の性格が強いのでここでは取り上げない。¹⁹

こうして、祖国戦争100周年を迎えたロシアでは、『戦争と平和』における愛国心のモチーフを強調する動きがある一方で、トルストイの創作姿勢や観点を批判的に分析する動きも見られた。2年後の第一次世界大戦の開戦は、このバランスを前者の方に大きく傾けることとなった。

2. 第一次世界大戦の開始と『戦争と平和』

1914年夏に第一次世界大戦が始まると、ロシアでは社会の広範な層が愛国心を高揚させた。ドイツの宣戦布告がナポレオンの侵攻を想起させたこともあり、祖国戦争の記憶が団結の象徴として参照され、「第二次祖国戦争」という呼び名が戦争の名前として人口に膾炙した。祖国戦争100周年を記念したばかりであったことも、これらの動きを刺激していた。芸術雑誌『覚醒』は、開戦とともに別冊付録『第二次祖国戦争』の刊行を開始したが、その第1号には次のように記されていた。「2年前にロシアは、ロシア国民に苦難をもたらした祖国戦争の100周年を祝った。今回の戦争は、ロシアにとっては第二次祖国戦争である。ロシア国民が、自らに襲いかかってきた苦難の中から、1812年の祖国戦争のときと同じように、勝利者として立ち現れることを期待しよう」。²⁰

¹⁶ *Дживелегов А.К.* Александр и Наполеон // *Обнинский, Полнер* (ред.). Война и мир.

¹⁷ *Мельгунов С.П.* На войне 1812 года // *Обнинский, Полнер* (ред.). Война и мир. С. 188, 196-197.

¹⁸ *Пичета В.И.* Война 1812 г. и народное хозяйство // *Обнинский, Полнер* (ред.). Война и мир. なお、第7章は *Сивков К.В.* Влияние войны 1812 г. на духовную жизнь России, 第9章は *Степанова В.Е.* Война 1812 г. в живописи である。

¹⁹ *Обнинский В.П.* Война сто лет назад и теперь // *Обнинский, Полнер* (ред.). Война и мир.

²⁰ *Дневник Европейской войны // Вторая Отечественная война. Обзор текущих событий.* (Бесплатное приложение к журналу «Пробуждение»). Вып. 1. 1914. С. 11.

祖国戦争と同様に、『戦争と平和』もまた頻繁に想起された。もはやポルネル・オブニンスキー編の論文集において見られたような批判的な観点は後景に退き、愛国心や国民団結のモチーフが強調された。文学基金とトルストイ博物館の共催で、テニシェフ学院で開かれた催しでさえもそうであった。これは毎年、作家の命日である11月7日に開かれていたものであるが、1914年の会合では文芸批評家のヴェングロフが次のような開会演説を行なった。「いつにもまして今日、トルストイの著作を読むことは、現代社会の最も熱い関心を集めている。示し合わせたかのように、誰もが戦争の最初の日々に『戦争と平和』に飛びついた。第一次祖国戦争の物語の中に、第二次祖国戦争と称されるようになった戦争について解明するための手がかりが見つかるのではないかという考えが、みなを鼓舞したのである」。「戦争の全本質を灰色の人民的兵士大衆に帰したことで、『戦争と平和』は実に深く現代的なのである」。また、レールモンツフと同様、トルストイを「反軍国主義者」と呼ぶことはできず、彼は「本当の戦士」である。²¹ 会合では、役者たちによって『戦争と平和』の一部が朗読された。出席はできなかったがクプリーンも「プラトン・カラターエフ」を読む予定であった。「ホールにいた何人かの負傷した将校は、全出席者の喝采を浴びた」という。²²

「国民作家」としてのトルストイの名声はいやましに上がった。スリョスキンの小説では『戦争と平和』の登場人物こそが祖国戦争を体現していた。「ロシアはこの大きな渦巻きに飲み込まれた。それはナポレオンの偉大な諸戦争よりも激しく、深く、祖国戦争の歳月よりも厳しかった。だが日々の生活もまた、これまでと変わらず強力であった——やはり人々は生まれ、暮らし、笑い、泣き、結婚し、子を産み、死んでいった。常にそうであったように。全てを見ているトルストイの、ナターシャとニコライのロストフ家、ボルコンスキー一家の人々、それにピエール・ベズーホフが12年に暮らしていたように」。²³ 家庭向け雑誌である『波』の1915年1月号には、まさに「国民的財産（Л.Н.トルストイの著作）」という題の記事が掲載された。これは、コペイカ出版社が『全世界パノラマ』誌の無料付録としてトルストイ全集を出し、その最初の配本が『戦争と平和』であることの予告であった。「最初の巻となる長編小説『戦争と平和』は、トルストイの最も巨大な創作物であり、われらの国民的な叙事詩であり、われらのイリアスであり、それと同時に一つひとつの戦争、とりわけ今回の戦争の年代記である。尊大なあらくれものが、全世界を自らの奴隷にしようという誇大妄想を抱いて、ルーシにふたたび襲いかかってきたのである」。

²¹ Венгеров С.А. Рыцарство духа // Речь. 8 ноября 1914. С. 3.

²² Памяти Л.Н. Толстого // Речь. 8 ноября 1914. С. 5.

²³ Слезкин Ю. Бабися // Сборник Лукоморье. Военные рассказы. Вып.1. Пг., 1915. С. 17-18.

この記事に関して注目すべきは、『戦争と平和』に登場する軍人の多様性を強調していることである。「『戦争と平和』の天才的な作者が創造した一連の類型において、われわれは全ての等級と称号、全ての兵科と地位の軍人を目にすることができる。兵卒プラトン・カラターエフにはじまって、総司令官クトゥーフにいたるまで」。²⁴ 1812年の祖国戦争も、そして第一次世界大戦も国民全体の戦争だということが、ここでの含意であった。

事実、軍人に限らず、『戦争と平和』には多様な階層や世代の人物が登場する。そのため論者は、個々の登場人物を引き合いに出すことによって、自分がとくに働きかけたい、あるいは論じたい集団に的を絞ることができた。たとえばインテリに戦争への参加を呼びかけたければ、ピエール・ベズーホフを参照すればよかった。カデット党機関紙『レーチ』の1914年10月19日号で、文芸評論家のフィロソフは次のように書いた。ロシアのインテリは「みな真実を愛し、善を信じているが、ピエールのように部屋着で腰掛け、賢い本を読んで、議論することのほうを好む」。だが、大戦で状況は変わった。「戦場で人民の血が流されているときに、高所からの批判にふけることは心理的に無理である。善良な、愛すべき人々はそれほど苛烈ではないのだ。ピエール・ベズーホフだって燃え上がるモスクワを離れなかったではないか...」。実際、いまやインテリも戦争遂行支援に身を投じ始めており、「ロシアの生活は、批判から、はからずも創造へと動いたかのようである」。²⁵

無論、ピエールと同じで、ロシアのインテリがすぐにたくましくなれるというわけではなかった。自分の心身を鍛えたいならば、インテリは快適なドイツの保養地に憧れるのではなく、ロシアの厳しい自然を知れ。このように書きながら、ある論者（おそらく評論家ペルツォフ）は、女官アンナ・パーヴロヴナ・シェーレルのサロンでの、「生きるちからをもたない青年」（第1巻第1篇第2章）というピエールの描写を引いた。「われわれはそろそろロシアの子供たちにロシアで生きる本当のちからを植えつけるべきではないのか（下線部は原文では強調。以下同じ）」。²⁶

子供に対して語りかけたければ、ロストフ家の可哀そうな末っ子のことを思い出せばよかった。『ペーチャ・ロストフ—ロシアとナポレオン1世の戦いの時代の物語』は、雑誌『誠実な言葉』の付録で、4分冊からなる。これは『戦争と平和』のペーチャの登場場面のダイジェストで、序文には次のようにあった。「ロシアの大地の偉大な作家、レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ伯爵は、ロシア文学の全ての作品のうちで最も優れたものになる長編小説を書きました。その小説の名前は『戦争と平和』といいます [...]。この小説の内容はたいへんに豊かでさまざまであって、その中からきちんとした中篇小説や短編

²⁴ Национальное достояние (Сочинения Л.Н. Толстого) // Волны. № 1. 1915. Столб. 97-98.

²⁵ *Философов Ф.* Критика и творчество // Речь. 19 октября 1914. С. 2.

²⁶ *Пер-ъ [Перцов?]*. Почему на «курортах» дорого? // Новое время. 9 июля 1915. С. 6.; *Толстой.* Полное собрание сочинений в 90 томах. Т. 9. С. 12.

小説をいくつも取り出すことができるほどでしょう。／ここで紹介するお話『ペーチャ・ロストフ』も、そうやって選り出されたもので、年の若い読者の皆さんに、トルストイの偉大な作品について、その全体にはまだ手が届かないでしょうけれども、たとえその一部だけでも知ってもらいたいと思ひ、つくられたものです。以下、本文はナターシャの名の日の祝いから始まり、ドロホフがペーチャの亡骸と出遭うところで終わる。²⁷

登場人物の背景が多様であることにくわえて、その一人ひとりが個性豊かであることも『戦争と平和』の強みであった。『波』1915年3号には、気難しそうなアンドレイや、頭でっかちの本の虫ピエールなどの戯画が載っている（『イスクリ』からの転載）。²⁸ ヒロインのナターシャに関しては、彼女を中心にして映画が一本製作されていることを記しておきたい。革命前に『戦争と平和』は三度映画化されているが、それは全て1915年のことである。ガルジンとプロタザーノフが脚本・監督を担当した『戦争と平和』は、2月13日に第一部、4月14日に第二部が公開された。ハンジョンコフ社が製作したチャルディニン監督の『ナターシャ・ロストフ（『戦争と平和』）』も、同じく2月13日の封切りである。タルディキン社もカメンスキーの監督で、この2本よりも早く『戦争と平和』の製作に入っていたが、完成が一番遅かったためにお蔵入りとなった。²⁹

3. 第一次世界大戦による『戦争と平和』の再読

ポルネルとオブニンスキーが『戦争と平和』ではなく後年のトルストイの観点を強調したのに対して、愛国主義の高揚の下では逆の側に力点がおかれた。³⁰ 開戦後二度目のトルストイの命日である1915年11月7日、文芸評論家のアイヘンヴァリトは『レーチ』紙上で次のように述べた。『戦争と平和』が現実にとっての例証であるだけではない。現在の

²⁷ Петья Ростов. Рассказ из эпохи борьбы России с Наполеоном I. По роману «Война и мир» Льва Николаевича Толстого. Пг. и М., 1915. Вып. 1. С. 5-6, 7; Вып. 4. С. 63.

²⁸ Волны. № 3. 1915. Столб. 118.

²⁹ Вишневский В. Художественные фильмы дореволюционной России (Фильмографическое описание). М., 1945. С. 56, 70, 159.

³⁰ トルストイの娘アレクサンドラが従軍看護婦に志願したことも、トルストイと戦争の結びつきを強固にしたであろう。戦争支持派の社会主義者で、医療要員に志願したアレクシンスカヤは、近衛連隊の一兵士との会話を記録している。この兵士はトルストイを何冊か読み、その反戦思想についても知っていた。彼女が、トルストイの娘も医療列車で働いていることを知っているかと聞くと、兵士はこう答えた。「いや、それは聞いたことがなかった。でもそれがなぜいけないんだ。そのことは俺たちの戦争が正しい戦争だってことをなおさらはっきり証明しているだけじゃないか。戦争を始めたのは俺たちじゃない。トルストイの娘は戦争についての父親の考えを間違いなく共有しているだろう。それなのに彼女は俺たちを助けに来たんだ。全部の戦争が同じじゃないってことだ」。
Tatiana Alexinsky (Trans. by Gilbert Cannan), *With the Russian Wounded* (London: Unwin, 1916), pp. 37-38.

現実が『戦争と平和』にとっての例証なのでもあり、この偉大なテキストのコメンタリーなのである。歴史と芸術が相互の中に反映しあっている。「思想家としては戦争と戦いながら、彼〔トルストイ〕は、芸術家また人間としては、戦争に特別な感情を抱いており、民間人の側には属していなかった。魂において文民ではなかったのである」。「トルストイにとって戦争は全くの誤解である。だが、それはあらゆる理性よりも強く、永続きするものでもあった」。ピエールが人生を恐れないようになったのは戦争のおかげである。「それが彼の魂を救ったのだ。戦争までは彼はただの善良な享楽主義者であり、モスクワのイギリス・クラブの会員であり、退役侍従であった」。「戦争のあとでは、捕虜としての苦悩を積んだあとでは、プラトン・カラターエフとの交流のあとでは、彼は人生の中にクラブを見るのをやめた。彼は真面目なものに親しむようになった。そして、彼の、再教育され、苦悩によって包まれた魂は、『何か大事で心を慰めるようなこと』を考えるようになった」。³¹

ナショナリスト的な評論家ペルツォフも、1915年大晦日の『ノーヴォエ・ヴレーミャ』で、トルストイと戦争について書いた。そのきっかけは、チェルトコフ編のトルストイの日記（1895-1899年）が刊行されたことであった。「いやはや、これはいかにわれわれから遠くなったことか！ヤスナヤ・ポリャーナの『無抵抗』、ヤスナヤ・ポリャーナの『無為』、ヤスナヤ・ポリャーナの禁欲主義と道徳主義、苦しい自己分析、自己批判、自己暴露、あわせてこの世の罪と弱さに対する苛烈な暴露...」。このように後期のトルストイを嘲弄したのち、ペルツォフは作家の戦争ものを称賛した。「トルストイはかつてはカフカースにいたし、セヴァストーポリの辺りにもいた。そこで彼は、大体においてわれわれが今体験しているのと同じような体験をした。そのときのトルストイは別のトルストイであった。『コサック』の、戦争ものの、それに十年近くかけて書かれた大叙事詩のトルストイであった」。³²

愛国心の称揚という観点だけではなく、もう少し作家の論理に即して『戦争と平和』を読もうとする事例がなかったわけではない。だが、その場合でも議論が行き着く先はあまり変わらなかった。精神医学者のベフテレフは、論文「ヴィルヘルム—ネロ型の異常者」の中で、ドイツ皇帝が戦争を引き起こした張本人であるという見解を否定しようとする。その際彼は、『戦争と平和』の歴史哲学を援用した。「Л.Н.トルストイが、彼の偉大な作品である『戦争と平和』にどのような結語を与えたのかを想起しよう。その中でわれらの偉大な作家は、100年前、ナポレオン戦争の時代に起こった、諸国民の衝突における個々人を、一般的な歴史法則に隠された未知の力のはたらきにとっての、執行人の地位にまで引き下げているのである」。このように『戦争と平和』の歴史哲学の特徴を正しく指摘しつ

³¹ Айхенвальд Ю. Памяти Толстого // Речь. 7 ноября 1915. С. 4.

³² Перцов П. Дневник Льва Толстого // Новое время. 31 декабря 1915. С. 5.

つも、結局ベフテレフの議論は、戦争責任はヴィルヘルム個人にではなくドイツ人全体にあるというところに帰結した。「責任は [...] 一人の人間にではなく、今次の戦争がそれに抗して行なわれているところの、現代のドイツ軍国主義を成長させ、支持し、養ってきた大衆全体にあるのである」。³³

また、『戦争と平和』には触れていないが、1915年11月7日の『カフカース』に掲載された論説もここで触れておきたい。それは、芸術を仮のものとして否定するにいたるトルストイの変遷を追いつつも、非戦主義の側面には触れず、「もし、実際、文化全体が単なる仮のものに過ぎないのであるとすれば、魂を殺すものは何なのであろうか。現代戦争の黙示録的恐怖の日々にあって、このことは考えるに値するであろう...」として、第一次世界大戦と後期トルストイの思索の間にむしろ一種の親和性を見出そうとしていた。³⁴

このような雰囲気の中で、開戦前に書かれた『戦争と平和』に対する批判的な論考にも、反論が加えられることになった。評論家のアンフィテアトロフは、1913年刊の『1812年—ロシア愛国主義の歴史の数章』の中で、『戦争と平和』における芸術的虚偽を論難していた。ニコライ・ロストフをはじめ、『戦争と平和』に出てくる将校は、僅かな例外を除けばみな肯定的な人物である。ひとは100年前の社会を羨みたくさえなる。だが、なぜこうした肯定的な勢力は「特別に大きな社会的結果を残すことなく去ってしまったのか」。なぜ彼らはアラクチャーエフシチナを許し、あるいはまたニコライ1世時代の反動的将校団へと変わってしまったのか。現実の展開と小説のこのずれに対して、アンフィテアトロフはこう答えた。トルストイは「魔法のような芸術的虚偽の力によって、それ〔アレクサンドル1世時代の将校団〕に関する否定的な典型的印象、われらの曾祖父や祖父たちの手になる文学のおかげでしっかりと根付いてきた印象をひっくり返すことを社会に強いたのである。トルストイがグリボエドフに勝った。ニコライ・ロストフがスカロズーブを償ったのである」。かくしてトルストイは、「以前は文学と社会とによって疑念と揶揄の対象にされていた反動的階級を、芸術的欺瞞によって魅惑的なものにすることに成功したのだ」。³⁵

思想家のローザノフが、第一次世界大戦が始まってからこれに噛み付いた。彼はアンフィテアトロフに好意的な匿名書評を通じてその議論を知り、憤慨したのだった。アンフィテアトロフも書評子も、1812年のロシア軍に弁明を強いようというのか、というのがロー

³³ Бехтерев В. Вильгельм—дегенерат Нероновского типа // История Великой войны. Т. 1. М., 1915. С. 233-234.

³⁴ Робакидзе-Кавкасиелли Г. Лев Толстой (К пятилетию со дня смерти) // Кавказ. 7 ноября 1915. С. 3.

³⁵ Амфитеатров А.В. Собрание сочинений А.В. Амфитеатрова. Т. 16. 1812 год. Очерки из истории русского патриотизма. СПб., 1913. С. 139-141, 218-219. スカロズーブはグリボエドフの『知恵の悲しみ』に出てくる粗野でいけすかない軍人である。

ザノフの怒りであった。「全ロシアがこの軍を信じ、愛した。それが流した血に感謝した。それによってロシアが守られたのだ」。ついでローザノフは、まるで第一次世界大戦の兵士が1812年のロシア軍の名誉を晴らしてでもくれるかのように、モスクワで志願看護婦として働いている女性からの手紙を長々と引き、その中で伝えられるロシア兵の純真さ、献身ぶりを強調した。³⁶

ポルネル・オブニスキー編の論集では、ポルネルの第1章「Л.Н.Толстогоの『戦争と平和』」が批判を呼んだ。その中でポルネフは、次のように論じていた。「非常に普及している見方によれば、ロシア国民の愛国心は1812年にはパルチザン戦争において現れたという。われわれは今日、パルチザン戦争を国民戦争から区別しようと考えている。パルチザン部隊は総じて兵士とカザークからなっていた。国民戦争は別の性格をもっていた。敵に対抗して蜂起する国民大衆の心理は『戦争と平和』の中に見出せない」。³⁷

祖国戦争を全国的なものとして描き出すことに慎重なこの見解に対して、第一次世界大戦中になってから小説家のブルシャーニンが反論した。彼は記す。「1812年戦争についての現代の歴史家の何人かは、『フランス人との戦争』に国民戦争の名称を与えることの正当性を否定している」。たしかに国民全体が自らの内部に湧き起こる意志によって戦いに立ち上がるという意味では、1812年の戦争も、さらには「われわれが経験している最中の戦争も国民的とは呼べない」。

だが、と彼は続ける。今回の戦争においては青年や少年が戦闘に参加し、勇敢な偉業を成し遂げているのであり、「われわれが本日まで目撃している士気の規模からいうならば、今回の戦争は国民戦争と呼ぶことができる。自然の力のごとく、それはわれらの青年たちをもとらえた。まだ年端もいかぬ子供から、学生、神学生、それに中学生などにいたるまで」。「思うに、今回の戦争の歴史は1812年の戦争と似たものにはならないだろう。しかし、人間の若い魂の特質は変わらないままである。われらの若い戦士たちは、トルストイが彼についてかくも多くを語った若い、まだ髭も生やさぬペーチャ・ロストフとどれほど似ていることだろう」。³⁸ こうしてブルシャーニンはペーチャを引き合いに出し、『戦争と平和』が多彩な登場人物をもつことの強みをあらためて明らかにした。

³⁶ Розанов В. О духе и смысле русской армии // Новое время. 16 декабря 1914. С. 5.

³⁷ Полнер. «Война и мир» Л.Н. Толстого. С. 77.

³⁸ Брусянин В. Война, женщины и дети. М., 1917. С. 20-22, 25.

4. 不協和音の反映

『戦争と平和』による愛国心の喚起が、摩擦なしに進んだわけではない。むしろ、同作を支えの一つとした挙国一致ムードの醸成は、じきに困難にぶつかった。リベラルやゼムストヴォ活動家は、政府が城内平和体制の構築に消極的であり、政策決定を独占していることに不満を抱き続けていた。とりわけ1915年半ばにロシア軍の「大退却」が始まると、皇帝と政府による戦争指導のまずさに対する不満が表面化し始めた。

「大退却」の中でロシア軍は焦土作戦をとり、前線近くのユダヤ人やポーランド人をロシア内部へと追い立てた。祖国戦争や『戦争と平和』を思い出して耐えよという意見に対して、帝国のポーランド人エリートは反発した。文化的民族自治の立場をとるリベラル系の雑誌『民族問題』は、彼らにアンケートをとったが、その中で元第三ドゥーマ議員のポビャンスキは次のように回答している。「国民全体の強制的な追い立て...どう記憶をたどってみても、われわれのところで今日起きていることに、ほんのわずかでも似ているような歴史的事実を思い出すことができない。われわれは『戦争と平和』の中の頁、ロシア人が1812年にスモレンスクから急いで逃げ出す様が、美しいまでに悲劇的に描かれている頁に感嘆する。だが、当時は条件は違っていたはずだ。ロシア住民はみずから、自発的に去ったのだから...」。³⁹

リベラルの拠点であったモスクワでは、国内の不協和音がペトログラードにおいてよりも表に出やすかった。急進的なモスクワ企業家の新聞『ロシアの朝』は、1915年11月のトルストイの夕べで起こった混乱について報じている。それによれば11月6日、夫婦共同育児・教育協会の両親クラブでトルストイの夕べが開かれる予定であり、モスクワ市長チェルトコフや、トルストイ主義者ゴルブノフ＝ポサードフなどの名前が、出席者のリストには挙がっていた。だが、クラブ理事会によれば、「参加を約束した人々の集団的な拒絶」によって、会合は開かれないことになった。拒絶の理由は、議事日程にあるトルストイの肖像の下に、「戦争をもたらす道徳的悪についてあれこれを吟味することはできない」、「戦争は自然発生的な現象ではなく、純粋に人間によるものである」、「戦争は人間によって許された犯罪である」という作家の言葉が記されていたことによるものだとされた。もっとも、集まった人たちの中には、チェルトコフやゴルブノフ＝ポサードフたちがこのようにいうのは変だと考えるものも少なくなかった。そのため『ロシアの朝』が、参加を拒絶したものの一人に聞いてみると、参加拒否の理由は、「トルストイの何らかの思想や言葉

³⁹ Трагедия Польши (Анкета) // Национальные проблемы. № 4. Сентябрь. 1915. С. 20.

に対する原則的な態度」によるのではなく、「外部からの介入の可能性を純粹に技術的に考慮した」からに過ぎないということであった。⁴⁰ この経緯にははっきりしないところがあるが、トルストイといえば戦争物であり愛国心であった、開戦間もない頃の雰囲気とは異なる動きが出てきたことが伺える。

1915年11月7日の『ロシアの朝』に掲載されたЛ.ポクロフスキーの「真実の騎士」も、同様の傾向をもっていた。そこでは、オレーニン、プラトン・カラターエフ、ニコライ・ロストフ、アンドレイ、ピエール、ネフリュードフ等、トルストイの肯定的登場人物はみな、「彼らにとって共通の感情である、醜悪なこと、虚偽と生活のあらゆる悪に対する深い道徳的憤りによって、互いに近いものとされている」とされた。戦争肯定の気分はこの論説にはなかった。⁴¹

この年の末に『ニヴァ』に発表された児童文学者チュコフスキーの論説「子供と戦争」も、『戦争と平和』を引きつつ、現状を批判した。彼によれば、少年十字軍と同様に、子供たちの間に出征熱が広がっている。それは、15歳のペーチャ・ロストフが父親に軍務につきたいと願ったのと同じであり、「われらはみな微笑んで、可愛いやつよ！と思う」。しかし、「果たしてわが軍は既にそれほど弱体であり、年少のものたちの助けを借りねばならないというのだろうか。／もし彼らが障害者になって帰ってきたとすれば、われらは彼らに何といえがいいのだろうか。どうやって彼らの目を見ることができのだろうか」。⁴²

1916年になると、ペトログラードでも、トルストイの命日の会合や評論は、現状批判の色をやや強めるようになった。11月5日、ペトログラード市会のアレクサンドルの間で、トルストイの思い出に捧げられた文学と音楽の夕べが開かれた。最初に演説した文学研究者のサクーリン教授は、次のように述べた。「Л.Н.トルストイほどに結集点たりうる人が他に見出されようか。『戦争と平和』、これは長編小説の題名であるだけではない。これは偉大な芸術家・思想家の全生涯の名前なのだ。現代という時代は、Л. Н. を自らの中に抱え込むことができなかつた。真実を述べねばならない。ロシアは己れの偉大な芸術家・思想家にとってふさわしい存在ではなかつたと」。⁴³ モスクワでも1916年11月7日にトルストイ協会が記念集會を開いたが、そこで朗讀ないし上演された作品は『セルギイ神父』『文明の果実』『幼年時代』であり、愛国小説としての『戦争と平和』の称揚とは明らかに雰囲気が異なつた。⁴⁴

⁴⁰ Толстовцы и война // Утро России. 7 ноября 1915. С. 4.

⁴¹ Покровский Л. Рыцарь правды (7-го ноября 1910 – 7-го ноября 1915 г.) // Утро России. 7 ноября 1915. С. 5.

⁴² Чуковский К. Дети и война (Окончание) // Нива. № 52. 26 декабря 1915. С. 968.

⁴³ Вечер памяти Л.Н. Толстого // Речь. 7 ноября 1916. С. 3.

⁴⁴ Годовщина смерти Л. Н. Толстого // Утро России. 8 ноября 1916. С. 4.

『レーチ』では、文芸評論家のフィロソフが、次のように記した。パリのヴィクトル・ユーゴー博物館やワイマールとフランクフルトのゲーテの家を訪れたもの、イギリスにおけるシェークスピア崇拝を知っているものは、ロシアでは偉大な作家達の博物館が惨めな状態におかれていることに驚くだろう。「プーシキン館」はまだ紙上の存在であるし、連日のように「トルストイ主義者」の訴追が行なわれており、国立トルストイ博物館の設立を望むべくもない。それでも民間の動きによってモスクワとペトログラードにトルストイ博物館がつくられたのは素晴らしいことであり、世界史上「最も『反トルストイ的』な歳月」にあつて喜ばしいことである。⁴⁵ 第一次世界大戦を「反トルストイ的」と呼ぶことによって、フィロソフもまた作家を愛国主義から切り離そうとしたのだった。

むすび

『戦争と平和』は祖国戦争についての小説であると同時に、祖国戦争に関するロシア人の記憶の一部を構成する作品ともなった。そのため、歴史の様々な局面において、『戦争と平和』は活発な議論の対象となってきた。本稿で検討した時期には、ロシア社会での同作の読まれ方、受容の仕方には二つのパターンが見られた。社会内部の思潮的対立が反映される場合と、社会統合のための象徴として機能する場合とである。1912年には前者が看取されたのに対して、第一次世界大戦期には当初は後者が前面に出てきたが、次第に前者の要素も増していった。

いずれの場合でも、『戦争と平和』がロシア社会に大きな存在感をもっていたことには違いがなかった。とりわけ、社会内部の対立が反映されるのは、『戦争と平和』が社会全体を描き出そうとする壮大な作品であり、かつ生彩に富んだ多様な登場人物を特徴とすることからきていたといえる。多様な読みを許すことは、それ自体が作品のもつ大きな力である。

1912年に、そしてまた第一次世界大戦が長引くにつれて、社会内部の対立が『戦争と平和』の読みに影響を与えたことは、当時のロシアにおける社会統合の弱さという従来の議論を確認するものであろう。しかしながら、開戦後の1、2年に同作が大きな統合力を発揮できたこともまた、これまであまりに軽視されてきたのであった。この短い期間にロシア社会は、「国民的」テキストそのものではないにせよ、その候補はもつことができたのである。

⁴⁵ *Философов Д. Толстовский музей // Речь. 7 ноября 1916. С. 3.*

「国民的」テキストそのものではないというのは、当時のロシアでは『戦争と平和』に親しんでいた社会層はかなり限定されていたからである。だが、1917年の革命後、識字率と教育水準、それにプロパガンダ技術の向上を経て、ロシアが大「祖国戦争」を迎えたとき、『戦争と平和』はよりいっそう大きな統合力を発揮することになった。そのための萌芽は、すでに1914年に始まる数年間に見られたものであった。少なくとも一つのことは明らかにいえる。第一次世界大戦中のロシアにおいて、『戦争と平和』ほど熱心に言及された文学作品は他になかったのである。

Роман Л.Н. Толстого «Война и мир» и российское общество в столетие Отечественной войны и в годы Первой мировой войны

ИКЭДА Ёсиро

Данная статья посвящается тому, как роман Л.Н. Толстого «Война и мир» оценивался в российском обществе. В особенности анализируется отношение россиян к роману, во-первых, в год столетия Отечественной войны 1812 г. и, во-вторых, во время Первой мировой войны. Именно в эти два исторических промежутка роман привлекал чрезвычайно большое внимание со стороны разных частей социума. В качестве основных материалов в статье исследуются официальные и неофициальные сборники и книги тех лет, а также периодические издания, включая «Речь», «Утро России» и «Новое время». Анализ показывает следующее.

Во время столетнего юбилея Отечественной войны в 1912 г. официальные круги подчеркивали патриотический мотив в романе, в то время как либеральные деятели – внутреннее противоречие в историософии Толстого и развитие тенденции к антимилитаризму. После начала Первой мировой войны летом 1914 года, однако, последний подход к роману почти исчез, и люди с разными политическими взглядами начали обращаться к роману как объединяющему символу для общества, восхваляя простой патриотизм русских солдат в нем. Статьи довоенных лет, критически относившиеся к роману, стали подвергаться нападениям со стороны «патриотов». Правда, вместе с началом «Великого отступления» русских войск в середине 1915 года антимилитаристический подход к роману и творчеству Толстого в целом вновь становился заметнее в обществе. Вместе с тем, нельзя недооценивать ту объединяющую силу, которую приобрел роман «Война и мир» в исследуемый период. В особенности в первые годы Первой мировой войны, когда никакое художественное произведение не привлекало такого большого внимания, как «Война и мир».